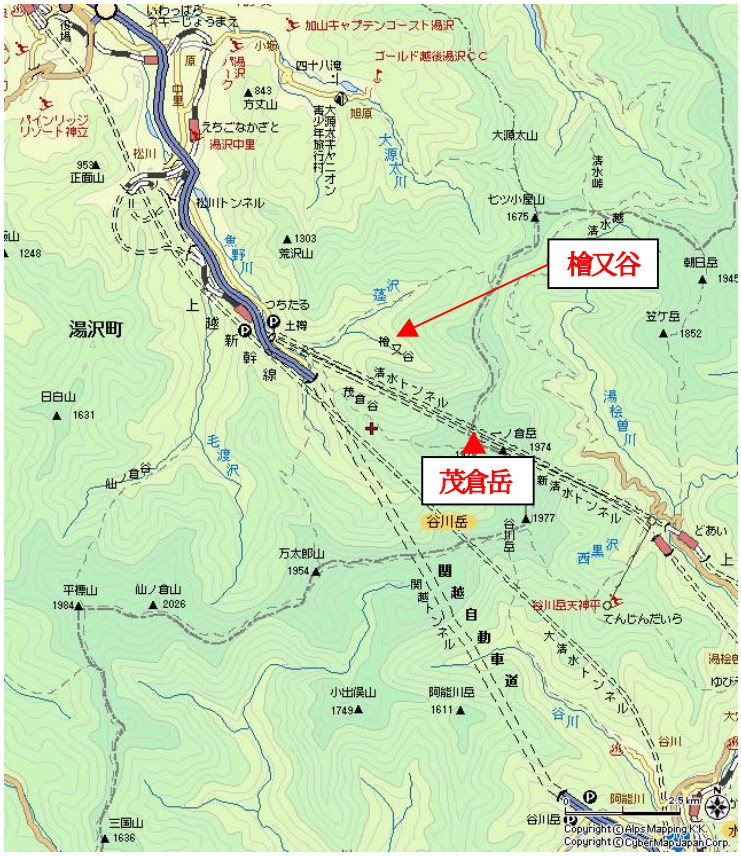
上越茂倉岳・檜又谷大スラブ沢

（２００６年9月の記録）

彷徨倶楽部
浅野幸子

日　程：２００６年9月1日（金）夜～9月2日（土）
参加者：本間美知子、浅野幸子、山田英夫、高田長一、秋田誠

９月１９日（土）快晴
土樽駅（車デポ）６：５０ --- 檜又谷出合７：４０～７：５５ --- 二ノ沢出合８：５０～９：０５ --- 大スラブ沢F２　９：５０～１０：３０ --- 断層上（コーヒー・タイム）１２：１０～１３：００ --- 大スラブ終了点の潅木帯１３：４５～１４：２５ --- 大スラブ沢と小スラブ沢中間尾根（標高1，５１０メートル）１５：２０～１５：３０ --- 縦走路１６：３５～１７：０５ --- 蓬峠１７：２５～１７：３０ --- 檜又谷出合１９：３０



労山の会議出席のため秋田さんの上京が決まった。これ幸いと前日の土曜日に大スラブ沢に行くことになった。それまではっきりしなかった関東の天気だが、週末が近づくにつれ秋晴れを期待できる天気図に変った。いよいよ金曜日の夜、２２：００に西武新宿線の南大塚駅に集合し、まだ新しく乗り心地の良い山田さんのセレナで、にぎやかに土樽駅へと向かった。到着は２４：００をまわっていたが、誰もいない駅でネズミが出迎えてくれた。トイレに逃げ込んだネズミを高田さんが箒と塵取りで捕獲しようと試みたが、何時の間にか雲にまかれてしまった。ひと騒動の後、久しぶりに集まったこともあり駅待合室で山田さんの奥さん手作りの卵焼や枝豆・軟骨唐揚げ・ポテトチップスなどを肴に宴会が始まった。いつのまにか２：３０になっていたので急いでシュラフにもぐり込んだ。

６：００起床。寝不足だが、外はすでに日も昇り快晴の様子。急かされるようにシュラフを片付け、朝食を頬張り、パッキングと慌しく準備にかかった。渓流シューズとクライミングシューズの両方が装備表にリストアップされていたので両方用意して行ったが、出発前に秋田さんに確認してみると渓流シューズだけにしたというので、一人を除いて右へ習え、クライミングシューズは置いて行くことにした。１９９４年に檜又谷二ノ沢を遡行したことがあり、その時のように当然車で檜又谷出合まで行くものと思って聞いてみると、あっさり「1時間弱だから歩いて行けばいいでしょ。」の答え。ガッカリして歩くこと１時間弱。右から檜又谷が入ってきているのが確認できた。蓬沢と檜又谷の概念図には、出合手前に谷につづく登山道があるように書かれているが踏み跡を確認できないまま、出合

を見送り林道を進むと蓬沢に柵で囲まれた取水口の施設があり板を渡した橋が架かっていた。柵を跨ぎ橋を渡って対岸に行くと、尾根を回り込み檜又谷に通じる整備された踏み跡があったのでそれを辿り檜又谷の取水口の施設に出た。以前も同じ取り付きだったはずなのに全く覚えていなかった。登山体系の概念図では、檜又谷左岸に登山道があるように書かれていたが、それらしき踏み跡は見当たらなかったので沢を遡行することにし、渓流シューズに履き替えた。

檜又谷は途中一箇所釜をかかえた小滝があり右岸をへつり通過したが、全体的にゴーロの連続だった。単調なゴーロ歩き１時間弱で二ノ沢出合、更に１５分弱で大スラブ沢出合に到着した。大スラブ沢に入ってすぐのＦ２は落差２０ﾒｰﾄﾙを超える見事な滝だった。高田さんがトップで草付を抱え傾斜が緩くなっている右岸から落ち口に出た。高田さんが右岸の木を支点にザイルを固定してくれたので、後のメンバーはザイルからビレーをとって登った。落ち口に出ると確保用の立派な支点が２箇所あった。本間さんは、大スラブと聞いて用意してきたクライミングシューズに履き替えて登って来た。Ｆ２の上も多少傾斜のある小滝が続いており、クライミングシューズの方が快適な様子だった。

F2の登攀

大スラブを攀る

しばらく行くと５ﾒｰﾄﾙ程の滝に到着。滝上には青空を背景に正に大スラブが広がっており、スラブからカモシカが我々を見下ろしていた。滝上に出ると大スラブの断層をはっきりと見ることができた。左岸より大スラブを左上し、右岸よりの段差の一番少ないあたりを登り断層上にでて大休止。あまり平らな寛げる所ではなかったが、ここで秋田さんが取って置きのウイスキー入りコーヒーをご馳走してくれた。飲み物は大丈夫だったが、水流が少なく、日陰一つ無い広いスラブに容赦なく日差しが照りつけていたので、熱中症気味となり、食べ物はほとんど喉を通らなかった。大休止の後、残りのスラブをつめ、草付から潅木体の藪コギ、最終的には小スラブ沢と大スラブ沢を分ける支尾根に取り付き、武能岳から派生する尾根にでて武能岳から蓬峠へ続く登山道を目指した。

武能岳から派生する尾根まででると踏み跡があり多少は歩きやすくなったが、１２年前の記憶とは違い下草や潅木が大きくなったためか、すっかり暑さにやられて石のように重くなってしまった体では、なかなかはかどらなかった。高田さんが一人武能岳の頂上を目指しているのを眺めながら登山道にでると、秋田さんが出迎えてくれてビールで乾杯となった。腹ごしらえをしていると高田さんも戻ってきて、日没と追いかけっこで下山にかかった。すっかり暗闇となった中、土樽駅を目指して林道を歩いていると、先行して下山した山田さんと高田さんが車で登ってきてくれた。予定時間を大幅に超過していたので、今日中に帰宅できるかどうかギリギリだったが、ひとまず温泉で汗を流して、一目散に帰路についた。振り返ると、長い夢のような一日だった。普通なら涼しいはずの沢登りだが、こと大スラブ沢に関しては、日陰一つなく夏の太陽に照り付けられた岩盤登り、暑さに弱い人は暑さ対策が必要だ。

後日談だが、翌週の水曜日午後、気がつくと最後の藪コギでかすり傷を受けた左腕が一箇所ポツリと発赤していた。虫に刺されたと思いありあわせのムヒを擦り込んだのだが、その晩、発赤が広範囲に広がり痛みが加わり３８度を超える発熱となった。これはただ事ではないと思い、翌日すぐに医者に行って山行の話をして、治療を始めたのだが軽度の蜂窩織炎（ほうかしきえん）になっていた。以前、山での怪我が原因で蜂窩織炎になった秋田さんの体験談を聞いていたので手当てが早く大事には至らなかったが、ほんのかすり傷でも気をつけなければいけないのだなと痛感させられた。